
Abstract

An Investigation of the Features of Superior Golf Instructor “Harvey Penick” with KJ Method : Understanding the Heart of Japanese Edition of ‘*Harvey Penick’s Little Red Book*’

Atsushi Iwamoto
Iwate Prefectural University

After Harvey Penick, one of the superior golf instructors, was inducted into the World Golf Hall of Fame in 2002, his coaching of golf is often explained expediently in Japan in spite of the fact that he is one of the best Instructors in the history of golf. It is necessary to explain about Harvey Penick through evidence from features of his books. The purpose of this study is to examine the Japanese edition of ‘*Harvey Penick’s Little Red Book*’ with KJ Method, and to make features of the book clearer. To operate KJ method, the 144 sentences were found out from the book, and the most important 70 sentences were selected.

The results of this study are: 1) The heart of Japanese edition of ‘*Harvey Penick’s Little Red Book*’ is found out with KJ Method, 2) Two features under the heart of the book are found out as concerning his personality, 3) Remaining three features under the heart of the book are found out as concerning his coaching of golf, 4) There are relationships among all of five features, 5) There is one part of the relationship as functions of updating his coaching of golf, and 6) There is another part of the relationship for updating his thoughts reflectively on a regular basis. These suggest that Harvey discovered the wisdom of golf from his whole experiences in his lifetime.

Keywords: Harvey Penick, Golf, Coaching, Feature, KJ Method

キーワード：ハービー・ペニック、ゴルフ、コーチング、特徴、KJ 法

優れたゴルフ指導者“ハービー・ペニック”の特徴についてのKJ法による究明 ——日本語版『奇跡のゴルフレッスン』の核心の把握——

岩本 淳

1. 目 的

ハービー・ペニック (Harvey Penick; 1904-1995) は、アメリカ人プロゴルファーであり、ゴルフのコーチである (以下、「ペニック」とする)。ペニックは没後7年の2002年に、ゴルフの発展に大きく寄与した功績を認められて、世界ゴルフ殿堂 (World Golf Hall of fame) への殿堂入りを果たした。その博物館の中心部にあるウォール・オブ・フェイム (Wall of Fame) には、殿堂入りメンバーの栄誉を讃えるブロンズ製の記念楯が設置されている。そして、そこにあるペニックの記念楯には、彼の功績について「競技における偉大な教師の一人。彼の生徒にはトム・カイト (Tom Kite)、ベン・クレンショー (Ben Crenshaw) やキャシー・ウィットワース (Kathy Whitworth) が含まれる。… (略)」の文字が刻まれる (資料1)。

ペニックは、ゴルフ殿堂入りした生徒であるトム・カイトらを指導するといった実績をあげて、名声を博しても直ぐにゴルフの指導書を出版しなかった。しかし、彼はキャリアの晩年である1992年に、『*Harvey Penick's Little Red Book*』を出版した。ペニックは出版の決意について、「蓄積してきた知識を胸に秘めておくのは間違っているかもしれない。」と回想した¹。果たして、ペニックは周囲の期待に応えるように、自分の指導書を出版した。それは、多くのゴルファーとゴルフのコーチにとってはもちろんの事、他のスポーツに携わるコーチにとっても幸運な出来事であった。

『*Harvey Penick's Little Red Book*』の日本語版『奇跡のゴルフレッスン』は、1993年に出版された。なお、本稿では以降、『奇跡のゴルフレッスン』を『奇跡のゴルフ』と略して記述する。ペニックの『奇跡のゴルフ』の文章は、ペニックの口調そのままに優しさが溢れている。そして、その内容はゴルフに関する凡そ考えつく問題に対するペニックの自身の経験に基づく助言に満ちている。『奇跡のゴルフ』の体裁には、ゴルフの指導書でありながら、非常に珍しい特徴がある。すなわち、原書同様、写真やイラストが一切用いられない体裁なのである。

この『奇跡のゴルフ』の原書『*Harvey Penick's Little Red Book*』は、全米でベストセラーとなったゴルフの指導書であった。しかし、日本版『奇跡のゴルフ』に関するスポーツ教育学的な研究はあまり行われていない。その理由には、目次の配置に体系的な順列がなく、また、その小見出しに目新しい理論は謳われないことが上げられる。しかし、『奇跡のゴルフ』に一度目を通せば、誰もがペニックが初心者からチャンピオンまで指導した優れたゴルフ指導者である事実を知ることになる。そして、読むほどに読み応えの増す内容の魅力を知ることになる。ペニックについての特徴を体系的に説明することが困難であることを理由に、彼を単なるゴルフ指導者と見做すのは早計である。この『奇跡のゴルフ』に関して、ペニックのゴルフ教師とまで呼ばれた特徴を把握する研究は、スポーツ教育学に価値ある視点をもたらす。

本研究者は、『奇跡のゴルフ』に着目して、ペニックのゴルフ指導法に関する研究を行った。

それは文化人類学者の川喜田二郎の著書『発想法』にあるKJ法を用いて、ゴルフ指導法の特徴を解明する試みであった。しかし、KJ法の研修の機会を通じて、その研究に採用したKJ法の手続きには問題があることが分かった。問題の一つは、『奇跡のゴルフ』の目次の小見出し91個を、KJ法を実施する情報として採用した点である。それらの小見出しの文章はどれも文字数が少なく、また、大部分が体言止めで表現されるため、KJ法の難度は上がった。つまり、質感に乏しい体言止めの表現に対するKJ法の発想は、その思考がより多くの言外の意を取り扱うことになる。また、もう一つの問題は、発想のみを繰り返すべき作業の一部に、同じ単語を含むラベルを結びつける作業を行った点である。これは分類的な作業であって、KJ法における発想の思考ではなかった。これら二点の綻びある手続きは、ベニックのゴルフ指導法の特徴とした結果に少なくない影響を及ぼしたと想像できる。つまり、ベニックのゴルフ指導者としての特徴について、十分に解明されたと言うことはできない。

本研究の目的は、KJ法を実施するラベルにより体言止めの少ない情報を採用すること、そして、発想による統合の作業を遵守して精度ある手続きとすることで、ベニックの著書である日本語版『奇跡のゴルフ』における彼のゴルフの指導について質的研究の観点から核心を把握して、ベニックの優れたゴルフ指導者としての特徴を解明することである。

2. 方 法

はじめに、KJ法の手続きについて述べる。KJ法は、いわゆる狭義のKJ法を採用する。すなわち、狭義のKJ法とは元ラベルを作成し、グループ編成、図解化、叙述化を一連なりに実施することである。

第一に、元ラベルの作成について述べる。元ラベルとは、狭義のKJ法を実施するために情報を書き入れたラベルや紙片を指して言う。まず、『奇跡のゴルフ』を数度通読して、ベニックが言わんとする要点の箇所を探し出す。この箇所を紙面に書き出して、元ラベルに転記するために、一文、ないし、二文からなる文章に調整する。その際は、語句の重複する箇所の削除と「てにをは」の調整を行う。そして、これらの調整された文章を市販のラベル（ニチバン製ML-108 縦24mm×横53mm）に書き入れて、元ラベル候補を作成する。さらに、全ての元ラベル候補を一覧に配置して、それらの内容を吟味する。最も重要と思われる元ラベル候補を70枚選択して、それらを元ラベルとする。

第二に、グループ編成について述べる。グループ編成とは、前述の元ラベルをその全体感に基づいて統合することである。質的に近い元ラベル同士を発想の思考により一組みにして、表札と呼ばれる新たな情報とする。表札をつけられない元ラベルは、そのまま次の段階の情報とする。このグループ編成を数段階繰り返して、最終段階で10グループ以内にまとめる。

第三に、図解化と叙述化について述べる。図解化とは、元ラベルを一覧する図解と呼ばれる図面を作成することである。まず、まとめられたグループ（以下、「島」とする）に対して、シンボルマーク（以下、「シンボル」とする）と呼ばれる島の象徴となる名称を付与する。そして、島と島との間に何らかの関係が存在するかを検討して、明解な関係を見出される場合、それを関係線で表示する。さらに、全ての島から浮かび上がる全体の本質である核心を把握する。また、叙述化について述べる。叙述化は構造化で作成された図解の内容を文章や図表で説明することである。ただし、本研究では考察の章にまとめる。

最後に、本研究における図解の提示の仕方について述べる。通常、KJ法を70枚の元ラベ

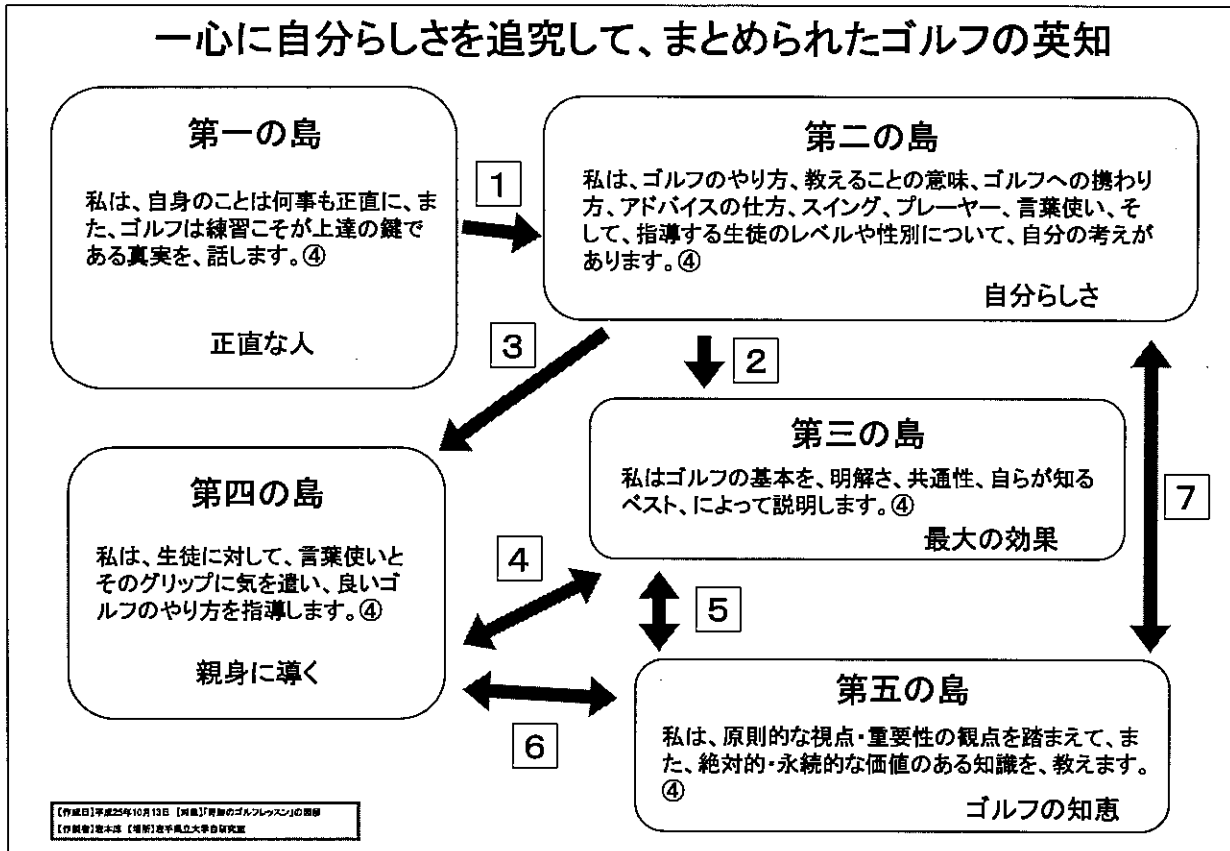


図2 KJ法による『奇跡のゴルフ』の図解のインデックス

た。そして、第五の島は「私は、原則的な視点・有用性の観点を踏まえて、そして、絶対的・永続的な価値のある知恵を、教えます。」であった。

続いて、島に付与したシンボルについて述べる。すなわち、第一の島のシンボルは「正直な人」とした。第二の島のシンボルは「自分らしさ」とした。第三の島のシンボルは「最大の効果」とした。第四の島のシンボルは「親身に導く」とした。そして、第五の島のシンボルは「ゴルフの知恵」とした。

さらに、島と島との間に明解な関係を7つ見出した。それらは、3つの一方向性の関係線で表す関係、そして、4つの双方向性の関係線で表す関係であった。一方向性の関係線について述べる。すなわち、第一の島から第二の島への関係線①、第二の島から第三の島への関係線②、第二の島から第四の島への関係線③を見出した。また、双方向性の関係線について述べる。すなわち、第三の島と第四の島との関係線④、第三の島と第五の島との関係線⑤、第四の島と第五の島との関係線⑥、第二の島と第五の島との関係線⑦を見出した。

最後に、『奇跡のゴルフ』の特徴に関する詳細な考察のために、図解の部分である島毎に詳細を提示するための部分図解「第一の島の細部図解」、「第二の島の細部図解」、「第三の島の細部図解」、「第四の島の細部図解」、「第五の島の細部図解」を作成した（図3、図4、図5、図6、図7）。

4. 考察

ペニックの優れたゴルフ指導者としての特徴について、『奇跡のゴルフ』における彼のゴルフの指導に関する図解、すなわち、インデックスと部分図に基づいて考察をする。

第一に、『奇跡のゴルフ』の核心である「一心に自分らしさを追究して、まとめられたゴルフの英知」について述べる。この核心は、一人のゴルフ指導者が生涯を捧げてゴルフの指導に打ち込む姿を捉えた。ペニックはゴルフに関する自分らしさを追究して、見つけ出したゴルフの知恵を英知と表現することも可能な水準にまとめ上げた。彼は生徒の立場に立って、ゴルフの知恵に備わる普遍的な価値を伝えようとした²。ペニックのゴルフに携わる姿勢と指導の際の態度は生徒に信頼の念を抱かせて上達へと導いた。

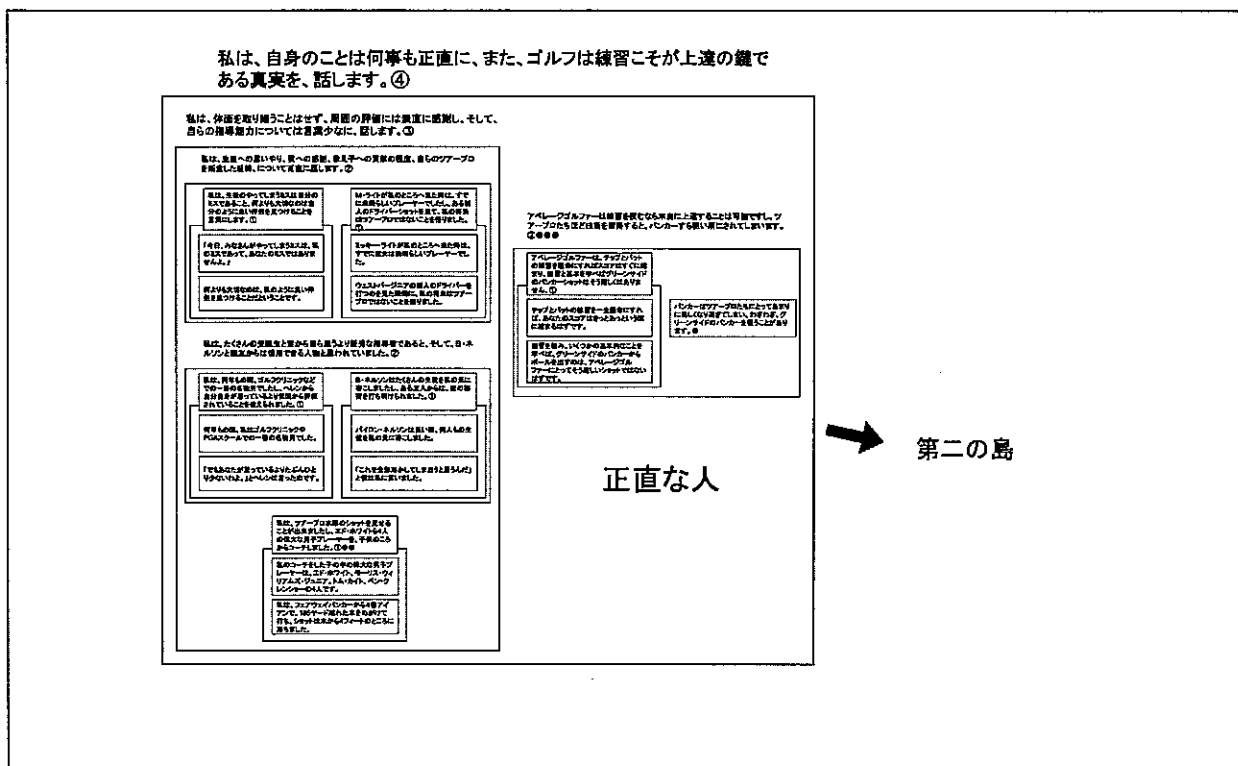


図3 第一の島の細部図解

第二に、『奇跡のゴルフ』の核心の直下に捉えた5つの島の内容から、ペニックの優れたゴルフ指導者の特徴を考察する。第一の島は「私は、自身のことは何事も正直に、また、ゴルフは練習こそが上達の鍵である真実を、話します。」に統合された。そして、この島のシンボルは「正直な人」であった。図3に示した「第一の島の細部図解」の通り、ペニックの性格や人柄に特徴を捉えた。「正直な人」とまとめられたペニックの発言や行動からは、彼がゴルフの指導者としては真面目な性格だったことが伺われる。例えば、「今日、みなさんがやってしまうミスは、私のミスであって、みなさんのミスではありませんよ」と、ペニックの指導を受けた結果として生徒がボールを上手に打てない可能性を見通して、彼は生徒の気持ちに配慮して言葉を掛けた³。これは、普通のゴルフ指導者には見られない発言である。自分のゴルフ指導法の優秀さを良く知るペニックならではの、生徒に心配りをするゴルフの指導であろう。そして、ペニックの厳格な一面が捉えられた。それは他人に対する厳格さで

はなく、自分自身に向けられる厳格さであった。すなわち、体面を取り繕うことをせず、周囲への感謝をしっかりと言葉にして伝えて、自身のツアープロ水準のゴルフの腕前や指導の能力と輝かしい業績については言葉少なに話をした。また、ゴルフにおける上達は練習に拠るとの真実を、生徒に説明するのにお茶を濁す真似をしなかった。

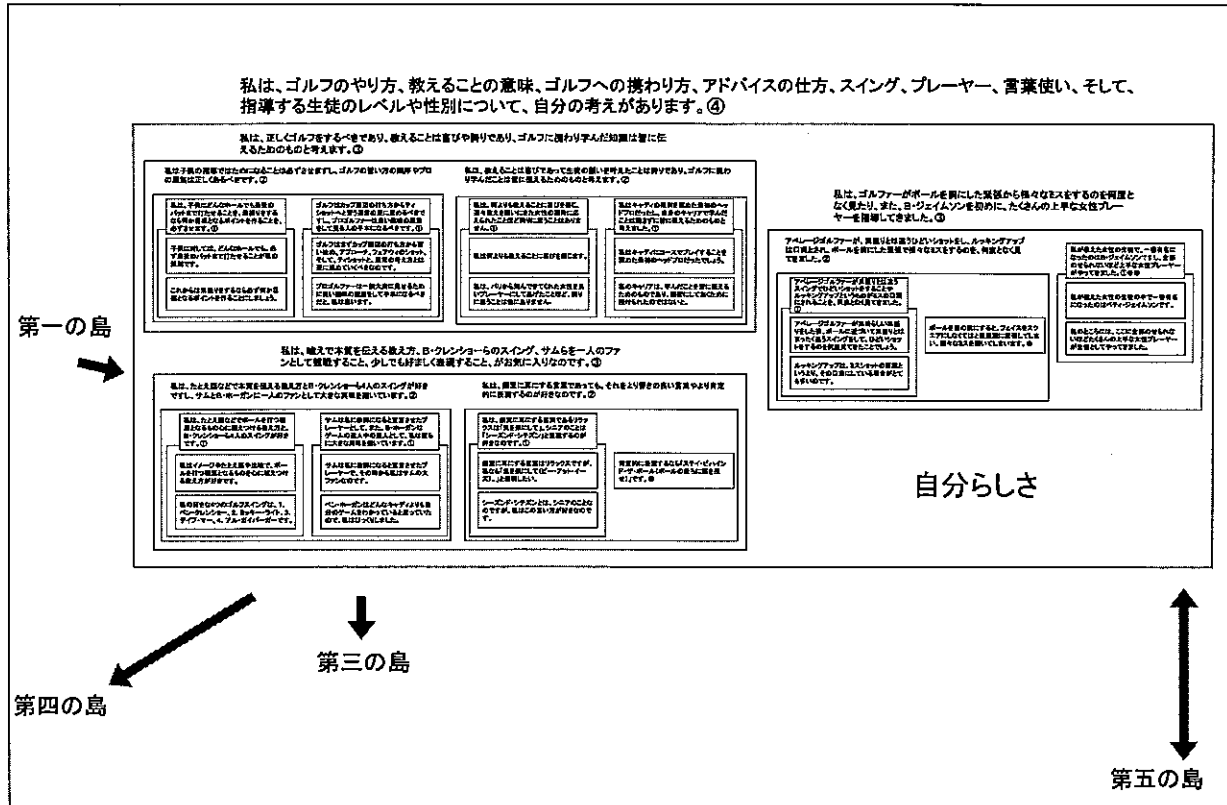


図4 第二の島の細部図解

第二の島は「私は、ゴルフのやり方、教えることの意味、ゴルフへの携わり方、アドバイスの仕方、スイング、プレーヤー、言葉使い、そして、指導する生徒の技術水準や性別について、自分の考えがあります。」に統合された。そして、この島のシンボルは「自分らしさ」である。図4に示した「第二の島の細部図解」の通り、ペニックのゴルフに関する主張はどれも、間違いなく成功すると確信を得るまで確かめられたものばかりであることを特徴として捉えた。彼はゴルフに関して本質を見極めようとする探究心により、確信を得るまで追究した。ペニックは、ゴルフに関するあらゆる主題について、それらに正解が存在するかのようには思索して、正しいと確信した内容を自身の見解とした⁴。例えば、彼のお気に入りの言い回しである「ステイ・ビハインド・ザ・ボール (stay behind the ball)」は、生徒に否定形でアドバイスをするよりも長く効果が持続する伝え方であることは彼の一つの結論である⁵。ペニックは、正しいゴルフをすべきこと、教えることは自身の喜びであること、たとえ話で本質を伝える教え方を好むこと等々、正に広範に及ぶ主張を持っていた。一方で、彼の生徒となったプレーヤーの技術の水準は、何度もミスを繰り返すアマチュア、女性の初心者、女性のプロゴルファー、そして、プロまで、幅広く指導をした。ペニックの「自分らしさ」とした見識には、彼の万能なゴルフ指導者像が映し出されていた。

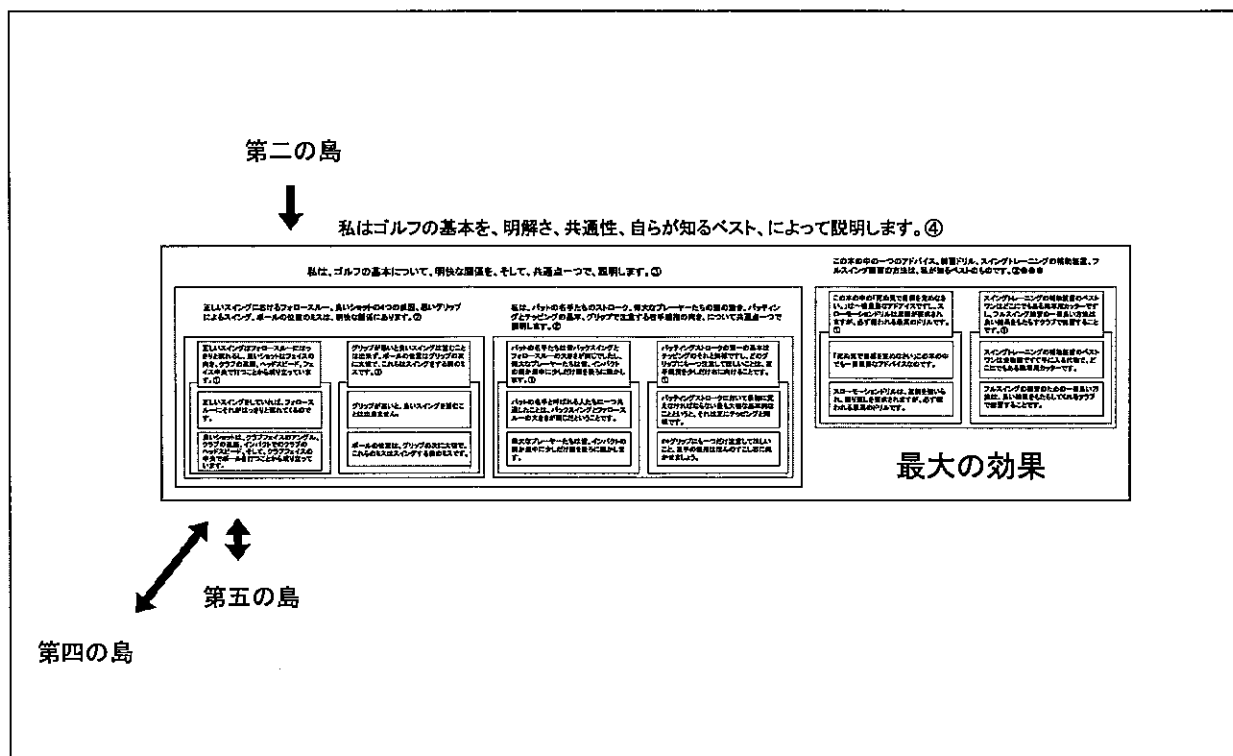


図5 第三の島の細部図解

第三の島は、「私は、ゴルフの基本を、明快さ、共通性、自らが知るベストによって、説明します。」に統合された。そして、この島のシンボルは「最大の効果」である。図5に示した「第三の島の細部」の通り、ペニックのゴルフ指導法におけるアドバイスに関する特徴を捉えた。彼は、ボールを打ち方について基本を重視したアドバイスをした。そして、それを習得・習熟するための練習の仕方についても、同様であった。さらに、ペニックのアドバイスは、どれもが単純明快に伝えられて、曖昧さや無駄は徹底的に省かれた⁶。おそらく、ペニックは生徒を上達させるには、アドバイスの効果を徹底的に高めるだけでなく、アドバイスの誤用や乱用を避けることも大切であると考えていたに違いない⁷。シンボルである「最大の効果」は、自身のゴルフ指導者としての存在意義を最高の水準で発揮することを目的としたペニックのゴルフ指導法における真髄と思う。一方、ペニックはゴルフの大切な基本について明快に、共通点一つで、そして、生徒へのベストをアドバイスする能力を備えていた。仮にペニックは生徒に誤ったアドバイスをした場合、彼はそれに速やかに気がついて、問題の本質を追究して原因を解明し、自身の誤りを正したであろうことは想像に難くない。

第四の島は、「私は、生徒に対して、言葉使いとそのグリップに最も気を遣い、良いゴルフのやり方を指導します。」に統合された。そして、この島のシンボルは「親身に導く」である。図6に示した「第四の島の細部」の通り、ペニックのゴルフ指導法は生徒本位である特徴を捉えた。シンボルの「親身に導く」は、ペニックにとっては非常に重要な視点であるように思われる。なぜならば、第二の島にあるところの、ペニックの望んだ教える喜びや教えられた誇りを感じたいとの願いを叶える唯一の方法であるからだ。一方、ペニックは生徒に、精神状態を調えること、自然体でのプレー、良い態度やスイング、そして、練習の習慣を身につけることを勧めた⁸。そして、生徒を惑わせる用語、悪い言葉、「～してはならない」などは口にせず、生徒のグリップに最も気を遣って指導をした⁹。ペニックのゴルフの指導は、生徒を高い水準のゴルフへ導こうとする実践であった。彼の圧倒的な指導力は、周囲にとっ

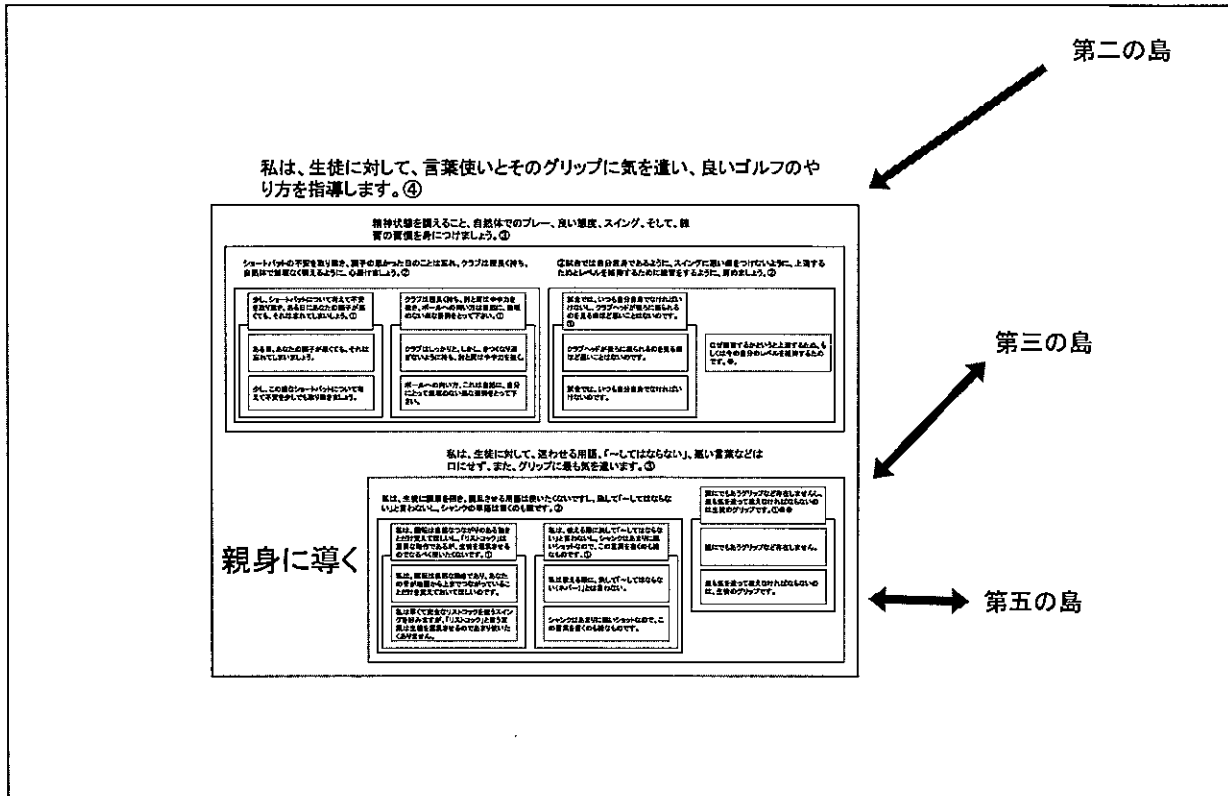


図6 第四の島の細部図解

て信じがたい水準の成果をもたらした¹⁰。

第五の島は、「私は、原則的な視点・有用性の観点を踏まえて、また、絶対的・永続的な価値のある知識を、教えます。」に統合された。そして、この島のシンボルは「ゴルフの知恵」である。図7に示した「第五の島の細部」の通り、ベニックは、学んだゴルフに関する知識に対して普遍的な価値を見出す特徴を捉えた。ベニックの学びは、広くて深い、ゴルフに関する理解である。ベニックは、自分自身と自分のゴルフ指導法を改善することで、順番・順序、原則的な視点、無視の出来ない経験則、魔法のような価値などの基本にまとめ上げた。例えば、「スローモーションドリルは、自宅で出来る練習法です。(中略)、費やした時間は必ずゴルフコースに出た時に報われます。」と説明して、スイングを覚えるために効果的に学ぶことの出来る方法を教えた¹¹。何人もの偉大なチャンピオンやゴルフ殿堂入りしたゴルファーが教えを請いにベニックの元を訪れたことから彼が真に優れた「ゴルフの知恵」であったことがわかる。ベニックのゴルフを一心に追究してまとめ上げた知識は、伝説の賢人が備える英知を連想させる水準の高みに到達して、人々から理解される時を待っているかに見える¹²。

第三に、核心の直下に捉えた島々の間に見出した7つの関係は、図2に関係線として示した通りである。7つの関係線の繋がりに大きく3つの特徴を捉えた。それら3つの繋がりの内容を、ベニックの優れたゴルフ指導者の特徴として考察する。

まず、1つ目の繋がりは、5つの島を一連なりとする、本流的な繋がりである。すなわち、第一の島である「私は、自身のことは何事も正直に、また、ゴルフは練習こそが上達の鍵である真実を、話します。」を起点として、関係線①、関係線②、関係線③、関係線④、関係線⑤、そして、関係線⑥により、第五の島である「私は、原則的な視点と有用性の観点を踏まえて、そして、絶対的・永続的な価値のある知識を、教えます。」を結びつける。核心の直下の島々

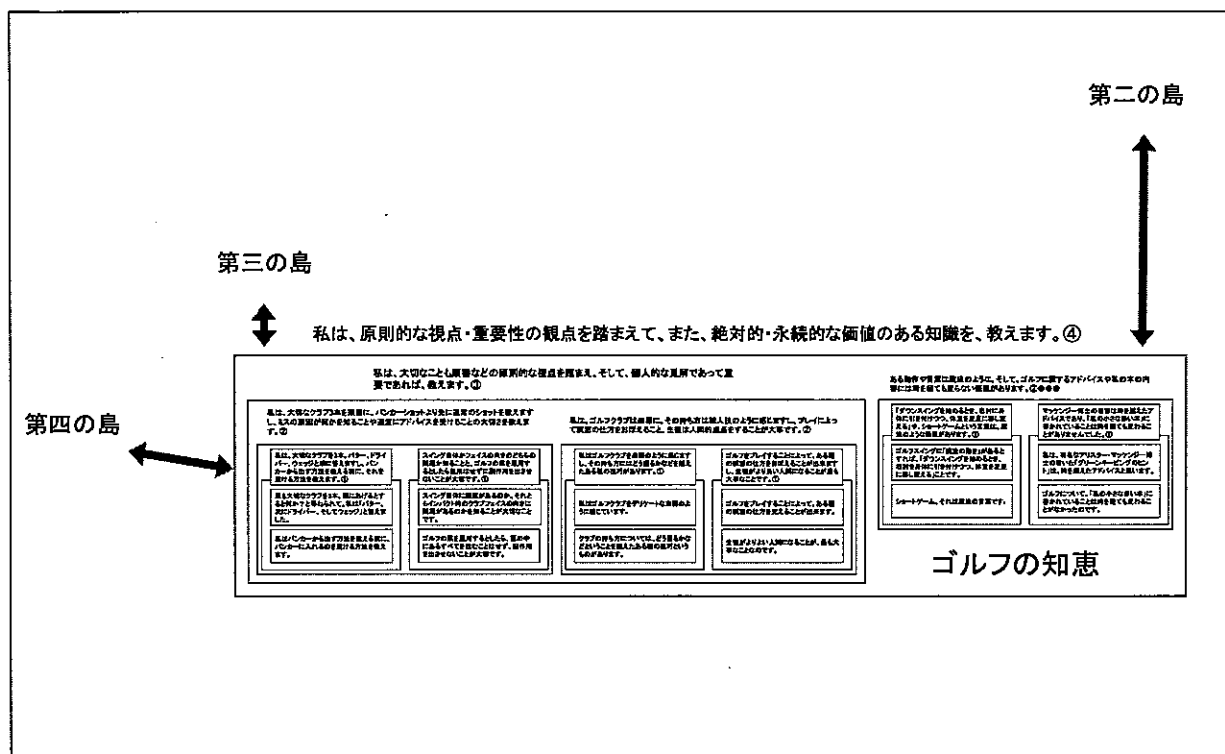


図7 第五の島の細部図解

に捉えた5つの特徴は一つに繋がっていた。すなわち、ペニックスの正直な克己的な性格は明解なゴルフに関する「自分らしさ」溢れる見識を形成して、「最大の効果」をアドバイスに追求した「親身に導く」ゴルフ指導法の実践によって、「ゴルフの知恵」としてまとめられる行程を成したことが特徴と考える。

次に、2つ目の繋がりは、第三の島である「私は、ゴルフの基本を、明快さ、共通性、自らが知るベストによって、説明します。」、第四の島である「私は、生徒に対して、言葉使いとそのグリップに最も気を遣い、良いゴルフのやり方を指導します。」、そして、第五番目の島である「私は、原則的な視点・有用性の観点を踏まえて、そして、絶対的・永続的な価値のある知恵を、教えます。」を結ぶ循環的な繋がりである。この双方向性の関係線④、関係線⑤、関係線⑥で結びつけられる繋がりには、順逆に自在な結びつきを見出した。これは、ペニックスのゴルフの指導で直面する問題に対して、それを解決しようと試行錯誤の思索を繰り返した姿を捉えたと思う。例えば、ペニックスは自身の丁寧な指導故に生徒の質問に対して即答することができず、返答に翌日まで掛かることがあった¹³。ペニックスのゴルフ指導法は、ゴルフの基本を重視したベストのアドバイスをおこなうこと、一心に生徒の上達を導くこと、そして、時を経ても価値の揺らぐことのない程に「ゴルフの知恵」をまとめることを幾度も繰り返すものであって、その手間を惜しまない、労を厭わないやり方が特徴と思われる。

そして、3つ目の繋がりは、第二の島である「私は、ゴルフのやり方、教えることの意味、ゴルフへの携わり方、アドバイスの仕方、スイング、プレーヤー、言葉使い、そして、指導する生徒のレベルや性別について、自分の考えがあります。」と、第5番目の島である「私は、原則的な視点・有用性の観点を踏まえて、そして、絶対的・永続的な価値のある知恵を、教えます。」を結ぶ循環的な繋がりである。こちらの循環的な繋がりは、前述した2つ目の循環的な繋がりとはいくらかその機能は異なる。これは、日々のゴルフの指導に対処した思索を跨ぐように第二の島と第五の島を連絡して、ペニックのまとめた「ゴルフの知恵」を自身のゴ

ルフに関する見識と照らし合わせる。彼の人生における区切りまで含む、より長い時間の経過において発生する還流性を表すものと考ええる。ペニックは、まとめた「ゴルフの知恵」に備わる普遍的な価値に対して、「自分らしさ」でまとめたゴルフに関する見識について内省的に思索したことが特徴と考える。ペニックはゴルフに携わって不本意な結果に遭遇した場合にそれを学びの原点としたに違いない。

第四に、ペニックのゴルフ指導法の優秀性についての補足的な検討を加える。ペニックのゴルフ指導者としての記録ともいえる『奇跡のゴルフ』は、その内容に目新しい理論の提唱される箇所を見つけることが難しい。そもそも、ペニックは生徒に自身のゴルフ指導者としての経験を話し伝えて、生徒にごく控えめにアドバイスをした。彼の指導についての流儀は、『奇跡のゴルフ』の中でもぶれることはなかった¹⁴。ただ、ペニックから指導を受けるまで上達が叶わなかった、それも少なくない人数の、生徒が上達するのであった。ペニックの業績は明らかに歴史的な優れたゴルフ指導者に比肩する水準であり、彼はその業績に相応しいゴルフ指導法を確立していたと考えるのが妥当と考える¹⁵。そこで、ペニックの多くを語らない自身のゴルフ指導法について、その優秀性について一点を説明したい。それはペニックの生徒本位と自分らしさのバランス感覚溢れる指導を行った点である。ペニックは、トム・カイトがペニックを紹介する文章に記した通りに、何より生徒の個性を尊重して上達させる指導を行った¹⁶。ペニックは、『奇跡のゴルフ』の中で「レッスン (lesson)」の言葉の意味を、教師と生徒が練習の場にいるだけでなく、生徒がやりがいある練習をすること、と述べている¹⁷。ペニックのあくまで冷静な眼差しが生徒だけでなく、ゴルフ指導者としての自身に向けられて自身のゴルフ指導法の欠点を削ぎ落として、一つの理想のゴルフの指導が実践されたと思われる。

考察の最後として、ペニックの『奇跡のゴルフ』に関して狭義のKJ法で捉えた特徴について、質的研究としての限界の観点を検討をする。それは、ペニックのような稀に見る優れたゴルフ指導者を主題とする場合、研究者自身のゴルフとゴルフ指導者に関する理解力が一つの制限要因となる点である。本研究はKJ法の作業の精度そのものは高めてあるが、研究者本人としては、ゴルフに関する見識はペニックのそれに遥かに及ばないとの印象を持たざるを得なかった。今後、より高い見識を持ってKJ法が実施されるならば、結果に変化が生じる可能性がある。また、『奇跡のゴルフ』は非常に含みが多い表現が用いられたゴルフ指導書であることから、ペニックを主題とした研究が一層進められて成果が蓄積されることは、スポーツ教育学において優れたスポーツ指導者に関する研究の価値を高めることが期待できる。

5. 結 論

本研究は、ペニックの『奇跡のゴルフ』について、精度ある狭義のKJ法を実施して、ペニックの優れたゴルフ教師と言うべきゴルフ指導者として特徴を、質的研究の観点から解明した。ペニックは、生涯を通した自分らしさの追究によって、自らの学びであるゴルフの知恵から「ゴルフの英知」と表現するにふさわしい水準へと昇華させていたことが解明された。今後は、ペニックと彼のゴルフ指導法の研究を続けて、ゴルフ以外のスポーツ指導の場面に応用できる普遍的な知識、また、スポーツ界で広く利用可能な情報を得られるように進めていく。

謝 辞

最後に、故人となったハービー・ペニック氏の「*Harvey Penick's Little Red Book*」、ならびに、その日本語版『奇跡のゴルフレッスン』を出版の決意に対して深い感謝の意を表明する。また、本研究の手続きに採用した KJ 法に関して、主題を解き明かすための精度ある水準の実技への指導と助言を頂いた霧芯館—KJ 法教育・研修—川喜田晶子先生に対して心よりお礼を申し上げる。

〔付記〕

本論文のデータの一部は、平成 25 年 10 月に開催された、日本スポーツ教育学会第 33 回大会において、「優れたゴルフ指導者の特長の KJ 法による質的解明——ハービー・ペニックの著書『奇跡のゴルフレッスン』における核心——」として、発表された。

引用文献

岩本淳 (2008). ハービー・ペニックのゴルフ指導法の検討——『奇跡のゴルフレッスン』の小見出しのグループ化によって——, LIBERAL ARTS, 岩手県立大学共通教育センター, 2, 53-64.

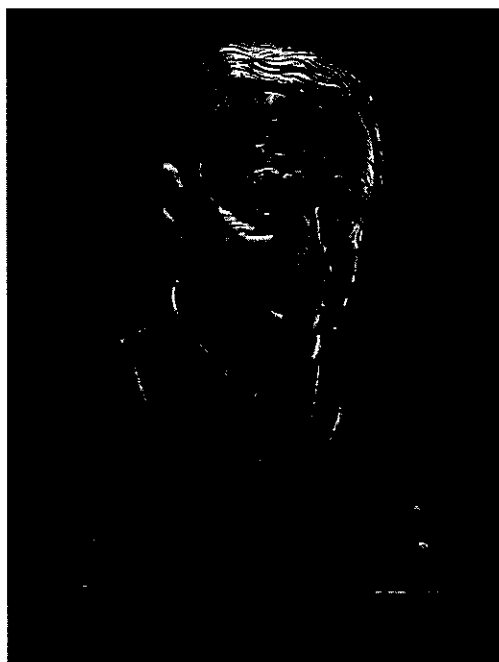
ハービー・ペニック著/バド・シュレイク, 本條強訳 (1993). 奇跡のゴルフレッスン, マガジンハウス, 233 頁.

参考文献

Harvey Penick with Bud Shrake (1992). *Harvey Penick's Little Red Book: lessons and teachings from a lifetime in golf*, Simon & Schuster, New York

川喜田二郎 (1967). 発想法, 中公新書, 220 頁.

資料 1



WGHF にあるハービー・ペニックの記念額

註

- 1) 「蓄積してきた知識を胸に秘めておくのは間違っているかもしれない。」奇跡のゴルフレッスン（以下、KGR と略す）、26.
- 2) 「キャッシー、すでにいい肩のターンを身につけていたんだよ。あなたは聞く必要がなかったんだ」と述べている、KGR、153
- 3) 「今日、皆さんがやってしまうミスは、私のミスであって、みなさんのミスではありませんよ」と述べている、KGR、140.
- 4) 「…、私がこの本の中で言っていることは、（中略）、何度も試してみた上で間違いなく成功すると確信を得たものばかりです。」とある、KGR、21.
- 5) 小見出し「ステイ・ビハインド・ザ・ボール」の文章中、「頭を前に動かすな」の肯定的な表現として、「ステイ・ビハインド・ザ・ボール」を薦めている、KGR、93.
- 6) 「…、あなたはすでに自然にいい肩のターンを身につけていたんだよ。あなたは聞く必要がなかったんだ…」とある、KGR、153.
- 7) 「ゴルフの薬と服用するとしたら、（中略）、ゴルフの薬は良く効きます。副作用が出てしまうのです。」と述べている、KGR、28.
- 8) 「…私はあなた方を教えているのではなく、導いているのです」、KGR、147.
- 9) 「この本の中では…『～してはならない』も『～するな』も乱発していますが、…ゆっくりと考えるゆとりがあると思うからです」とある、KGR、86.
- 10) ベニックが生徒を上達させた時、その場で見ていたプロ仲間から「彼に催眠術をかけたんだ。」とある、KGR、98.
- 11) 「スローモーションドリルは、自宅で出来る練習法です。忍耐を強いられ、何度も繰り返すことを要求されますが、費やした時間は必ずゴルフコースに出た時に報われます。ミッキー・ライトは、よくこのドリルを練習していました。…」と最高のドリルとして紹介されている、KGR、99
- 12) 「イントロダクション——ハービーのこと——」に、縁の深いゴルフのチャンピオンたちからベニックへの賛辞によって紹介されている、KGR、9-19.
- 13) 「間違って解釈されることを恐れて、質問に対して翌日まで答えを出せないでいる姿を幾度となく見てきました。」と、トム・カイトは述べている、KGR、11.
- 14) 「力になりましょうか」は、小見出し名としても名付けられている、KGR、50.
- 15) 「…自分の教え方はわかっているし…」とベニックは彼の教え方について、他のゴルフ指導者の教え方をする人のことを聞くのが好きと述べている、KGR、147.
- 16) 「イントロダクション——ハービーのこと——」のトム・カイトの文章中、縁の深いゴルフのチャンピオンたちからベニックへの賛辞によって紹介されている、KGR、10.
- 17) 「やりがいのある練習をすることが大切です。それが私の言う“レッスン”ということなのです。」と、ベニックが説明している、KGR、28.